

私は庭に立ち尽くし、抜けるようなコバルトブルーの海と空を見ていた。

眼下の港とその奥に広がる海の向こうに、宮古島北部の狩俣のかまぼこ板のように平らで細い半島が間近に見え、さらにその奥には黒潮が流れる東シナ海が横たわっている。

一年前に九一歳で眠るように息を引き取った祖母が住んでいた家で、一人暮らしを始めてみようとして越してきた。祖母の家は、伊良部島の佐良浜港を見下ろす斜面地の高台にあり、子どもどものころ夏休みの度にこの家に遊びに来た。そして、朝日が海の彼方から昇る光景を毎日飽きることなく眺めた。

古い家だが、居間や台所、風呂、トイレは八年前に改装され、住むのに不自由は感じない。家の周りを広い庭が取り囲み、ゆったりとしているのも気に入っている。私は縁側の畳の部屋に設えられている大きな仏壇の前に正座し、蝋燭に火を灯し線香を立て、ご先祖様に引越しの報告をした。そして、仏壇

に飾られている祖母の彌生と祖父の鳥雄と
祖父の双子の兄の高雄の遺影に向き直った。
「おじいちゃん、おばあちゃん、高雄さん。
これから、よろしくお願いします」

三人の遺影は、それぞれ優しく微笑んでい
る。祖父は一七年前に八一歳で他界し、大伯
父の高雄は沖繩戦で戦死していた。

元教師だった祖母はいつも穏やかで、怒っ
たところを見たことがなかった。祖母が大好
きだった私は、祖母が行く所はどこにでもつ
いて行ったし、祖母からは宮古や伊良部のむ
かし話をよく聞かせてもらった。

大伯父の遺影は、ともに軍服に身を包んだ
祖父と一緒に写っている。祖父が召集を受け
入隊のため帰省した際、学徒出陣によってす
でに入営していた兄の高雄を訪ね、那覇の写
真館で撮ったもので、二人は瓜二つで見分け
がつかないが、椅子に腰かけている方が祖父
で、後ろに立っている方が大伯父だと聞いて
いる。兄には左の目尻に黒子があつたと祖父

が言っていたが、古色蒼然としたこの古い写真
真では判るはずもなかった。

「高雄さんが命を助けてくれて、おじいちゃんに巡り合わせてくれた」と、生前に祖母から聴いた記憶があると母が言っていたが、その具体的な経緯は祖母も祖父も何も語らなかつたという。祖母と祖父と大伯父との間に一体どんな運命が巡っていたのか、今となっては知る由もないが、それが二〇万人もの犠牲者を出した沖繩戦に関係していることだけは確かだ。

私は、二一歳という若さで死ななければならなかつた大伯父を想った。仏壇には、大伯父の小指の遺骨が納められている箱がある。人の生死を分けるものは、一体何なのだろうかと思わずにはいられない。私の身めぐりにも、足音を忍ばせて不吉な影がそっと忍び寄っていた。

家の掃除と荷物の整理が一段落して、私は

抜けるような青空に誘われ散歩に出た。佐良浜の集落から北に海岸に沿って丘の道をしばらく行くと、道はそのまま五〇メートルほどの崖を下って海岸に続いている。海岸には昭和四一年に水道ができるまで、井戸のなかった佐良浜の住民が使用していた井戸跡がある。一日に三回も四回も、一〇〇段以上ある階段を水汲みに往復したのだと、祖母が懐かしそうに話していた。この辺りの海岸は切り立った断崖と岩場が続き、子どもの頃祖母と一緒によく磯遊びをした。岩磯を波打ち際まで進むと、岩陰に小さな蟹や色とりどりの魚の稚魚が泳いでいた。

「見かけない顔だね、どこから来たの？」

振り向くと、麦藁帽子にサングラス、水色のパーカーを着て、手にバケツを持った女性が立っていた。私より幾つか年上に見えた。

「佐良浜の方です」と私は答えた。

女性は無言のまま、じっと私を観察した。

「地元の人間じゃないよね？」

「ああ、引つ越して来たばかりなんです。そう言うあなたも、地元の人には見えませんが」
「分かる？ 二年前からなの、ここは。私も佐良浜なのよ。漁港のすぐ近くで、殿様御殿というスナックをやっているの。ナオミと呼んでくれたらいいわ、あなたは？」

「私は、野辺露子と言います。ここは、母の出身地なんです」

「ノベ……フキユ。もしかして、彌生さんのお孫さん？」

唐突に出た祖母の名に驚いた。

「ええ、祖母をご存じなんですか？」

「彌生さんとは、ちよつとした縁があつてね。じゃあ、丘の上の彌生さんの家に引つ越してきたんだ。彌生さんには、お世話になったのよ。助けてもらったの、危ないところを」

「へえー、祖母が」

意外だった。この女性と祖母との間にどんな繋がりがあったのか、想像もつかない。

「家はご家族と一緒に？」

「いえ、私一人です」

「一人で。何かわけがありそうね」

彼女の探るような眼差しに、どう答えようか迷った。

「あつ、いいのよ、話してくれなくて。人間、生きてればいろんなことがあるよ」

私の戸惑いを見透かしたように、彼女はそう言っただけ微笑んだ。

「一人住まいじゃ、色々と大変だね。これ、少し持って行きなよ」

彼女はバケツを私の方に差し出した。

「カメノテだわ。それも大きなものばかり」

「これに入れるから、広げて持って」

彼女は取り出したビニール袋を渡し、バケツからカメノテを掬って移した。

「これに海水を入れて持って帰るといいよ。もうきれいに洗っているから、そのまま海水

ごと塩ゆでするか、酒蒸しにしても美味しいよ。食べ方はわかる？」

「ええ、小さい頃食べた記憶があります。こ

んなに頂いていいんですか？」

「もつとあげてもいいけど、独りじゃ食べきれないものね。遠慮しなくていいよ、ここから。カメラ探りを教えてくれたの、彌生さんだから。いっぱいいる秘密の場所があるのよ。ここらの人たちは、カメラノテを食べないみたいだけど、意外と美味しいのよね」

彼女はビニール袋に潮溜まりで海水を入れ、口を縛って手渡してくれた。

「よかったら、近いうちに店に寄って。午後なら起きているから、きつとね」

そう言うと、彼女は慣れた動作で巧に石を渡り、足早に消えていった。

私は岩に腰を下ろし、海と空が薄く溶け合う水平線を眺めた。祖母からニライカナイのことを聞いたのは、この浜辺だった。海の彼方にあるというニライカナイは、あらゆる生命の源となる神々の世界であり、生者の魂が生まれ、死んだ者の魂が帰る場所となり、また祖霊が私たちを護ってくれる守護霊に生

れ変わる場所でもあるのだと祖母は言った。祖母の魂は、ニライカナイに辿り着くことができたろうか。祖母に逢いたかった。祖母の死が引金になったかのように、この一年で私の人生は大きく変転してしまった。

私は去年まで福岡の広告宣伝会社で、小さいながら地域情報誌の編集と営業を任されていた。入社以来がむしやりに働き、仕事が好きで仕方がなかった。男と伍して働き、同期で管理職に昇進したのも私が一番早かったし、これが天職だと思っていた。

しかし、昨年祖母の葬儀が済んだ頃から体に異変が起きた。腹痛が頻繁に起こるようになり、背中に鈍い痛みを感じた。大学病院で精密検査を受けると、ステージーの浸潤性膵管癌と診断され、すぐに入院し、慌ただしく手術を受けた。手術は成功し、ほっとしたのも束の間、先生からステージーでも膵臓癌患者の五年生存率が五十パーセントほどしか

ないことを知らされ、愕然とした。

それでも私は、退院してすぐに職場に復帰した。仕事に没頭すれば、がんのことであれこれ思い悩むこともないだろうと思ったからだが、しかし、そこに私の居場所はもうなかった。頼りないと思っていた部下が編集を仕切り、発行部数を伸ばしていた。周囲からは体を気遣われ、上司からは労りの言葉を掛けてもらったが、その言葉が逆に刃となって私に突き刺さった。自分は唯一無二の存在で、私の代わりなど居るはずがないと思っていたが、現実には余りに残酷だった。思い悩んだ末、会社に退職願を提出し、抱えきれないほどの花束をもらい、職場を後にした。

自分の中で、何かが終わったと感じた。これまでとは、見える景色が違った。自分なりに精一杯生きてきた三二年間だったが、言いようのない寂寥感に涙が止めどなく溢れた。これまで私を形作っていたものが脆くも崩れ去り、空っぽになってしまった自分がいた。

抗がん剤による術後治療も終わり、一応は寛解となったが、私は依然として五年生存率五十パーセントという難問を神様から突き付けられたままだった。これからどう生きていこうかと、あれこれ想いを巡らせたとき、祖母の家と宮古の島々の風景が浮かんだ。祖母が生きたこの島で、この家で暮らしてみようと決めるのに躊躇はなかった。島のサトウキビ畑や港や海辺を駆け廻っていた子ども頃に感じた、あの体の芯から発火させるようなギラギラとしたエネルギーが無性に懐かしく思い出された。宮古の島々が私を呼んでいる、そんな気がして仕方なかった。

私は庭木を前に、買ってきた鋸を持って立った。広い庭に防風を兼ねた庭木が繁茂して視界を遮っていたが、縁側廊下からそのまま宮古の海を眺めてみたいと思った。

しかし、朝から始めた作業は一向にはかどらなかつた。南国の木々は、背丈はそれほど

高くないが、びっしりと枝葉が密集して生い茂り、易々と片付くほど甘くはなかった。手で鋸を使って伐れる枝の太さはたかが知れていて、掌に余る太さになると鋸を引くにもそれなりに腕力が必要だった。私はついに木に挟まり取れなくなった鋸を手放して地べたに座り込み、天を仰いだ。自分の無力さに絶望したくなつたが、久し振りに心地よい疲労感を味わった。日を改めてまた伐採を続けようと思った。自力で庭の端まで視界を伐り開くことができれば、自分の不確かな未来も何となくうまくいきそうな気がした。

シャワーを浴び、簡単な昼食を済ませ、午睡をしようと縁側に寝そべって何気なく庭を見たら、草むらの中に一メートルほどの緑褐色のリユウキユウアオヘビがいた。頭をもたげ、物言いたげに悲しそうな眼差しで私の方をじっと見ていたが、やがて草むらの中に消えていった。この家には様々な生き物が蠢いている。バレリーナのように足を立てて家

の中を動き回る家蜘蛛は、三センチ近くもある大物がいるし、ヤモリはガラス窓を恐竜のように体をくねらせてわがもの顔で這いまわり、今も群れた小鳥たちがやかましく鳴き声を立てて庭木の中を盛んに飛び回っている。それらの生き物たちに、何かしら魂の宿りのようなものを感じては、私はどうにかすると時間を忘れるほど魅入られてしまう。

久し振りに体を動かしたせい、体が火照ってなかなか眠れず、私は祖母の箆笥で偶然見つけた『追想記』と書かれた祖父の手作りの古い冊子を取り出した。

祖父は長らく勤めた役場を退職した後は、小さな漁船を買って漁に出た。私もよく船に乗せてもらったが、一度だけエンジンが故障し、曳航してくれる船が来るまで祖父と一緒に海を漂い、陸地が全く見えない海域まで流されたことがあった。三六〇度見渡す限りの水平線に囲まれ、そのまま海の底に沈んでいきそう、あの時ほど心細かったことはな

ったし、海と空の大きさにあんなにも圧倒されたことはなかった。ニライカナイに段々と引き寄せられて行くようで、祖父にすがって泣きじゃくり、困らせたことを思い出した。

私が読んでいいものか迷ったが、思い切ってページを捲った。祖父は大正一四年生まれで、昭和五年生まれの祖母とは六つ違いだった。成績優秀だった兄の高雄は首里にあった。県立第一中学校から第五高等学校、京都帝国大学に進んだが、祖父はあえて国頭にあった県立農林学校に進学し、満州に理想郷建設を求めて満蒙開拓少年義勇軍に志願した。昭和一五年に水戸にあった内原準幹部訓練所で五か月間の訓練を受けたのち、翌年二月に新潟港から北朝鮮の羅津港らしんに渡り、さらに満州東部の勃利大訓練所ぼつりで農事と軍事の訓練に明け暮れたが、そこで召集を受けた。祖父は満州の第三国境守備隊に配属され、陸軍少尉として中隊長となり、満州東部の牡丹江近くの国境でソ連軍と対峙した。

昭和二〇年八月八日夜、ソ連は突如として対日宣戦布告し、九日零時を期して総兵力一五七万人、戦車・自走砲五〇〇〇両、航空機三四〇〇機という圧倒的な戦力と物量で満州、樺太、千島に侵攻した。戦車を主力としたソ連軍機甲部隊との戦闘では、一キロと離れていない隣の連隊が全滅し、その夜に別れの盃を交わしたが、すんでのところでは撤退命令が出されたことや、八月一四日夕に牡丹江河畔で敵戦車部隊と激戦となり、肉薄攻撃で多数の戦死者を出しながらも侵攻を食い止めたが、撤退命令により戦火の中を各自ばらばらに離散逃避したことなど凄惨な戦闘の有様が詳しく書かれていた。

祖父は八月一六日に武装解除となって、日本海に近い海林の捕虜収容所に収監され帰国を待った。しかし、それが苦難の抑留生活の始まりだった。ソ連領内の捕虜収容所を転々とした挙句、シベリア鉄道の貨車に詰め込まれて一か月間揺られ、カスピ海に注ぐボ

ルガ川近くのエラブカ収容所に移送された。さらにはウクライナのドニプロ市の収容所に移され、ドイツ軍捕虜とともに製鉄工場の復旧に従事させられた末、からくも帰還を果した。三年間に及ぶ過酷な抑留生活だった。帰りの汽車から見たウクライナの大地に揺れる地平線まで続くひまわり畑の光景を、決して忘れることはないだろうと綴られていた。

奇しくも昭和二三年一月一七日の自分の誕生日に自宅に帰着したが、誤報の死亡通知によって仏壇には自分の遺影が飾られていたのだという。そして、兄の高雄の戦死を知った祖父は、兄の遺骨を届けてくれた人に逢いに行き、兄の最期の様子を教えてもらい、半身をもがれたような喪失感を味わったと書かれていた。

祖父も祖母も、戦争のことは語りたがらなかったし、まして抑留のことなど祖父は一切話さなかった。私は、極東の日本海近くから

東ヨーロッパの地まで、約七千キロメートルを股に掛けた厳しい抑留生活を生き抜いた祖父の強靱な意志と肉体に感嘆するとともに、その強運に感謝した。

抑留された日本人は五七万五〇〇〇人、そのうち五万八〇〇〇人が過酷な強制労働と劣悪な抑留環境の中で命を落とした。もし祖父が生還していなければ、当然に私はこの世に生を受けていない。祖父の命の糸は戦争という破壊的な事象によって、細く頼りないものとなったが、曲がりなりにも私までその糸は繋がった。そのようにして幾世代にもわたって繋がれてきた私という命の糸に、不思議な感慨を覚えた。

夕方、港へ続く道を下り、北側の漁港の方に散歩した。漁港と道を隔てた路地際にへ殿様御殿〜と書かれた看板が出ていた。

「こんにちは。いらっしやいますか？」

半開きのドアから中を覗くと、炒め物をし

ている音がした。

「だれ？　どうぞ、中に入って」

カウンターの奥に、背中を向けたナオミさんが立っていた。

「あら、来てくれたのね。そこに座って、これだけやってしまおうから」

彼女はフライパンを忙しく動かすと、ガスを止めて中身を大皿に盛りつけた。ゴーヤーを油炒めした香ばしい匂いが漂ってきた。

「アユム、お姉さんに麦茶をお願い」

カウンター席の一番奥の暗がりには、漫画を広げた少年がいた。小学四、五年生ぐらいに見える少年は立ち上がると、冷水器からコップにお茶を注ぎ、無言のまま私の前に差し出すとした。

「どうぞ、でしょう」

ナオミさんの叱る声が飛んだ。

「どうぞ……」

少年は毒入りの飲み物でも差し出すかのように、怯えた瞳を私に向けた。

「ありがとう」

「アユム、船が帰って来たみたいだよ」

「うん、行ってくる」

途端に今度は屈託のない笑顔を見せ、少年は一目散に店を出て行った。

「DV野郎のお蔭で、あの子、少し叱るだけで、すぐ怯えるんだよね。あれでも、だいぶ良くなった方だけど」

彼女は少年の残像を目で追うように話した。

「料理しながら、話していいかな。ある程度料理を仕込んどかないと、ここのお客はつまみにうるさくてね」

そう言いながら、彼女の手は休みなく動き、野菜がまな板の上で細かく刻まれていく。

「スナックだけど、料理も出すのよ。私の料理は、彌生さんから教えてもらった地元の料理ばかりだけどね」

「私、出直して来ましようか？」

「いいのよ。彌生さんもよく遊びに来てくれ

ていたけど、いつもこんな感じで話していたの。あの子ども彌生さんに可愛がってもらって、家にもちよくちよく遊びに行っていたんだ」

「そうでしたか。お店は何時からですか？」

「六時から十時まで。お客はほぼこの漁師さんたちなのよ。漁師って朝が早いでしょう。だから時間も、それに合わせているの。あなた、仕事はあるの？」

「いえ、もうすぐ切れますけど、今は失業保険を貰っています」

「やっぱりね、そんなことだろうと思ったの。あっ、ごめんなさい、悪気で言っているんじゃないのよ。あなた、良かったら、この店、やってみない？」

「えっ、私が、ですか……」

唐突な申し出に、私は状況がうまく飲み込めなかった。

「常連さんばかりだから、結構安定した収入が見込めるのよ。一人で暮らして行くには十分だと思うけど」

「でも、あなたは、どうされるんですか？」
「D V 野郎がここを嗅ぎ付けそうになってきたから、別の土地に移ろうと思ってる」

「D V、ですか？」

「昔の旦那なの、酒乱の。ろくに働きもしないくせに、プライドだけは高く、気に入らないとすぐ暴力を振るうの。私だけならまだ我慢したけど、アユムにまで手を出すようになったから、逃げたのよ。執念深い男でさ、私たちのことをしつこく探し回っているの。平良の方で、私たちのことを嗅ぎ回っている男がいるって教えてくれた人がいて。ここでずっと暮らしたかったけど、ばれるのも時間の問題だろうから、今知り合いに頼んで、新しい街を探してもらっているところ」
彼女は時折顔を上げて笑みを浮かべ、他人の噂話でもするように事も無げに話した。
「あんたも気を付けなよ、男には。出来たら、男に頼らないで生きていくのが一番さ。最も、子どもはいた方が楽しいけどね」

「私、夜の商売は経験がなくて。ちよつと無理じゃないでしょうか」

「大丈夫、私もここが初めてだったのよ。女はね、昔から誰でも接待ぐらいできるように遺伝子されているのよ。ここら辺の人は、少し気性は荒いけど、皆さん、いい人たちばかりよ。この店ね、彌生さんがお世話してくれたの。前のアパートの隣のお婆ちゃんが彌生さんと知り合いです、彌生さんを頼って着の身着のままに逃げて来たの。だから、あなたが後をやってくれると、私も少し恩を返せたようで、有り難いのよ」

彼女は祖母を懐かしむように一時黙した。「考えてみてね。返事は早い方がいいけど、今日明日じゃなくてもいいから。たぶん、二週間ぐらいは大丈夫だと思う。あら、アユム、何ももらったの？」

後ろを振り向くと、少年が発泡スチロールのトロ箱を得意げに差し出した。「アツシ兄ちゃんにウニをもらった」

ト口箱の中には、赤い棘と白い棘が混ざった大ぶりのウニが数個入っていた。

「そう、よかったね。そうだ、このお姉ちゃんに一つ食べさせてあげなよ。彌生さんの孫なんだってさ」

少年は私の方を向くと、眼で付いてくるように合図して、先に店を出て行った。

「あの子、外に遊びに行きたいのを我慢して、店に私と一緒にいるのよ。私を護っているつもりなの、ああ見えても。泣かせるじゃない、あんな小さな体で、本当にもう」

彼女は目頭を手の甲で拭うと、鼻を吸った。

外に出て漁港の方に歩いていくと、少年が船上の若い漁師と話をしていた。漁師は作業の手を止め、険しい視線をこちらに向けた。私が小さくお辞儀をすると、その男もぶつきら棒に頭を下げた。背が高くがっちりとした体軀で、二十過ぎぐらいに見えて、日焼けした顔が一層彫り深く陰を作っていた。

男は船から降りるとその場にしゃがみ、手

のひらにウニを載せ、私の方を見遣った。

「こつちに來て。アツシ兄ちゃんがウニを剥いてくれるよ」

男は少年が渡したアーミーナイフの鋏でウニの殻を器用に丸く切り開けると、わたを落とし、今度はナイフから匙を取り出して中の卵巣を掬った。その卵巣を人差し指と中指の先に乗せると、バケツの海水ですすぎ、私の口元に差し出した。

私は一瞬ためらったが、男の指をそのまま口に含んだ。磯の香りと塩味ののち、ウニの蕩けるような甘みが口の中に広がった。

「美味しい、とっても美味しいわ」

「旨いだろう、これはシラヒゲウニだよ。今は養殖が多いけど、これは貴重な天然ものなんだよ。ねえ、兄ちゃん」

男は微かな笑みを少年に返した。

「ねえ、いつ漁に連れて行ってくれるの。もう、時間がないよ」

少年が甘えた口調で囁いた。

「ああ、分かっている。明日の土曜はどうだ。朝四時にここに来られたら、乗せてやるよ」。

「えっ、本当！　行く、行くよ」

少年の甲高い声が躍った。

「母ちゃんに、了解をもらってきな」

「うん、行ってくる。ちよっと、待ってて」

少年は勇んで店の方に走り去った。

「あなた、彌生さんの孫なんだって？」

男はナイフを弄びながら、立ち去る少年の背中から私の方に視線を戻した。

「ええ、祖母がお世話になりました」

「世話になったのは、オレの方だ。オレが漁師になりたての頃、金にならない雑魚しか獲れなくてさ。油代にも困っていたとき、彌生さんがその雑魚をいつも全部買ってくれたんだ。みんなは本当に美味しい魚を知らないだけだって言ってる。有り難かったよ、本当に。涙が出るぐらい」

男はそれっきり口をつぐみ、眼を細めて遠く海の方を見た。水平線の奥に、積乱雲が蜃

気楼のように浮かんでいた。

少年が店から小躍りしながら戻ってきた。

「お母さん、いいって。明日、約束だからね」

男は拳を作って応えると、ナイフを少年に返して私に一瞥をくれ、身を翻して漁船に戻っていった。

少年は男から受け取ったナイフを洗って服で丁寧に拭くと、太陽に翳した。

「それ、カッコいいね」

「これは屋外生活には役立つけど、戦闘の実戦には役立たないよ。実戦に役立つのはこれ」

少年はだぶだぶの右足のズボンの裾を少し上げ、直ぐに下ろした。脛に括りつけたナイフが一瞬だけ見えた。

「これは兵隊が使う戦闘用ナイフだよ。アイツが来たら、ぼくがお母さんを護らないといけないんだ。闘うよ、ぼく。どんなことをしても、お母さんを護ってみせる」

少年は薄く冷めた笑みを浮かべた。

「隠れ場所だって見つけてあるよ」

「隠れ場所？」

「そうだよ、もしもの時のためにね。絶対見つからない秘密の洞窟を見つけたんだ」

「それ、もしかしたら、西海岸にあるトーチカ跡じゃないの？」

「違うよ。トーチカ跡は観光客が来ることもあるから駄目だよ。もつと近くて、滅多に人が近寄らない安全な場所があるんだ」

少年は自信ありげにうなずいた。私は少年の一途な思いに危ういものを感じたが、少年の気迫に気圧されて何も言えなかった。

「ぼく、大人になったらここに帰って来るよ。カツオの一本釣り漁師になるんだ、アツシ兄ちゃんみたいに」

少年は眼を輝かせながら、憧憬の眼差しで漁船の上で作業をしている若者を見つめた。

私はここ数日、庭木と格闘を続けていた。小枝の伐採は少しずつ進展していたが、幹や太い枝や高所の枝葉は手つかずのまま残さ

れていた。自力では難しいことは判っていたが、さりとて業者に頼む気にもなれなかった。夕方に作業を切り上げ、シャワーを浴びてそのまま畳に横になると、すぐに浅い眠りに落ちた。何か得体の知れない黒く不気味な生き物が、私の周りを執拗に這いずり回っている夢を見ていた。

不意に目が覚めた。大型オートバイの排気音が玄関の方から響き、せっかちに呼び鈴が連続して鳴った。辺りはすっかり夜の帳に包まれ、体にじつとりと寝汗をかいていたが、私は家の灯を点け、慌ただしく玄関に急いだ。

「どなたですか？」

「オレ、アツシ。港で会った」

予想もしない訪問者に、一瞬心臓が高鳴った。なぜ彼がと、不安な気持ちを抱えたまま玄関ドアを少し開けると、ヘルメットを片手に緊張した面持ちで男が立っていた。

「夜遅く、すまない。アユムが来ていないか。あいつ、居なくなってしまったんだ」

「えっ、アユム君が。でも、どうして？」

男は一時沈黙した。

「ちよっとした事件があつて。とにかく、家の周囲を捜させてくれ。彌生さんの家に、よく遊びに行っていたそうだから」

ちよっとした事件？　そう頭の中で反問したが、あえて尋ねなかった。

「分かった。私は庭の方を探してみる」

庭を埋め尽くす木々の暗がりや懐中電灯で一つ一つ確認したが、人影はなかった。

「そっちは、どうだ？」

男が物置の方から足早に近づいてきた。

「こっちにも、居ないわね。そう言えば、あの子、この間隠れ場所になるいい洞窟を見つけたと言っていたの」

「隠れ場所？」

「ええ。私が、それは西海岸にあるトーチカ跡だろうと言ったら、滅多に人が近づかない、もっと近くて安全な場所だって言ったわ」

男はしばらく思索した。

「それは、アブガアの洞穴のことかもしれない」

「ああ、なるほど。長山から北に農道を上がったところにあるやつね？」

「あそこなら雑木林の中に隠れているから、人は滅多に來ないし、地下に洞窟があったはずだ。これから行ってみるよ。あんたはどうする？」

汗臭い体のことが脳裏をよぎったが、少年のことが気がかりだった。

「私も行くわ。一緒に連れて行って」
男はうなずくと、予備のヘルメットを投げてよこし、オートバイに跨り、目線で後部座席に乗るように促した。

オートバイは、爆音を響かせて急発進した。私は男の背中にしがみついた。

「ごめんなさい。汗臭いでしょう？」

「気にするな。オレも、作業が終わったばかりだ」

オートバイは、港の坂道を駆け上がって農

道に出ると、暗闇の中をさらにスピードを上げた。

「何があつたの？」

私は男の耳元に問いかけた。

「上級生をナイフで脅したそうだ」

「えっ、ナイフで？」

男は怒鳴るように言葉を続けた。

「そいつに、友だちがいじめられていたらしい。もうすぐ居なくなるから、何とかしてやりたかっただと言ったそうだ。相手の親が学校に通報したらしく、ナオミさんが先生に呼び出された」

「そう、そんなことがあつたの」

「ナオミさんが厳しく叱って、ナイフを取り上げようとしたら揉み合いになり、店を飛び出してそのまま帰ってこないそうだ。ナオミさんが同級生の方を当たっているが、今のところ何処の家にも行った形跡がない」

オートバイは何度か交差点で減速と加速を繰り返し、連続したカーブをスラロームし

ながら高速で抜けると、アブガアの洞穴のある雑木林がヘッドライトに黒く浮かび上がった。入り口があつた場所は密生した雑木に塞がれていたが、男は私から懐中電灯を受け取り、構わず中に踏み入った。私も男の後を追つたが、生い茂つた枝に阻まれ遅れてしまった。男は立ち止まり戻ってくると、私の手を荒々しく握り、再び奥へと歩き出した。

「オレの後ろを離れずに付いてこい」

男の背中が発する潮が混ざつた体臭を間に嗅ぎながら、私は必死に後に続き、いつの間にか男の服を握り締めていた。

しばらく行くと、木々が疎らな径の跡らしい場所に出た。径はそのまま、石炭袋のような真っ黒な地底穴に消えていた。台地がぼっかり口を開け、あたかも呼吸しているようだった。径は穴口の割れ目に沿つた急こう配の階段に続き、地底世界に呑み込まれていくように一〇メートルほど降りていくと、テラス状の平らな床が広がっていた。断崖にアンコ

ウのひしゃげた口のような洞窟の入口があり、そこから仄かに灯が漏れていた。

男が私に目配せをした。洞窟は天井から鍾乳石のつらら石が幾つも垂れ下がり、蠟燭の揺れる光に青白く水晶のように神秘的に煌めいた。中は意外なほど広く、洞窟の奥には莫藪が敷かれていたが、人影はなかった。

「アユム、出てこい。居るんだろう？」

しばらくして、洞窟奥の暗がりから少年が姿を現した。少年は上目使いに険しい視線をこちらに向け、口を尖らせた。

「母ちゃんが心配している、帰るぞ」

男が少年を促して戻りかけたが、少年はこちらを睨んだまま動こうとしなかった。

「どうした、なにが不服だ？」

男はドスの利いた声を発した。少年は少し怯んだが、反発したように声を荒げた。

「いやだ、ぼくは帰らない！」

男は少年を睨みつけたあと、有無を言わせず少年の腕を掴んで引っ張った。少年は抵抗

したが、男はかまわず少年を力任せに引きずった。少年は狂ったような怒声を発して男の手を振り解き、男に組みかかったが、男に弾き飛ばれて地面に倒れた。少年はなおも男に挑み掛かり、その度に弾き返された。少年が眼前に倒れ込んだとき、私は衝動的に少年に組みついた。

「もういい、もういいよ。君の気持はわかったから。ねっ、もう、やめて！」

少年がなおも男を睨んだまま立ち上がるうとするのを、私は必死に止めた。少年は唸り声を上げ、激しく足をばたつかせた。

「アユム君、教えて。なぜ帰りたくないの？」
少年は絞り出すように言葉を吐いた。

「ぼく、自分がこわいよ。また、お母さんを傷つけるかも知れない」

私は呆然として男を見遣った。男は困惑した眼差しを返した。

「君がお母さんを傷つけたの？」

少年は力なくうなずいた。

「どうして？」

「ナイフを取り上げられそうになって、もみ合っているうち、お母さんの腕を切ってしまったんだ。あいつと一緒になんだ、かっとする、何するか分かんないよ、ぼくも。あいつの血がぼくの体にも流れているんだ。だから、ぼくはお母さんのところには戻らない。ぼくは独りで生きていく」

少年は涙を溜めた目で私を睨みつけた。

「違うよ、君はお父さんと一緒にじゃないよ。体は両親からもらったものだけど、君の心は君だけのものだよ。決してお父さんと一緒にやないし、受け継ぐものでもないよ」

「ほんと？」

「ほんとだよ。この世に一人として、君と同じ人間はいないの。君は、君なの。ほかの何者でもないわ」

少年の顔に悦びの表情が浮かぶのを見ながら、私は一抹の不安を覚えた。自分の言葉の中に、大人のずるい嘘が潜んでいた。

少年は、それから素直に私たちの言うことに従った。私は男と少年を乗せたオードバイを見送りながら、少年の内に秘めた激しい情念が何か思わぬ禍をもたらさなければいいがと願った。

私はこの日、祖母の自転車に乗り、伊良部大橋を渡り、宮古本島に足を延ばした。台風が接近していたが、どうしても訪ねてみたい場所があった。本島の島尻集落は祖母が生まれ育った場所であり、子どもころに幾度となく祖母と一緒に行ったことがあった。そしてその近くの森には、かつて風葬が行われていたという洞窟があるはずだった。

祖母の家系は、霊媒師であるユタを多く出した血筋で、祖母の妹の陶子もまたユタだった。一度だけ大叔母に連れられ、御願のための聖地巡拝に同行したことがある。集落の近くの森の中にあるその聖地は、崖に穿った洞窟の奥に無数の人骨が散らばっていた。祖母

によると、私はそこで神がかりの訳の分からない言葉を口走った後気を失ったそうだが、全く記憶になかった。大叔母は、私には特別に強い霊感があり、ユタの血を受け継いでいるのだと言ったが、それ以後そんな経験をしたことは一度もなかった。しかし、病変を感じ出した昨年の夏頃から、幻聴や幻視を何度か経験し、頻繁に島で過ごした小さいころの夢を見るようになった。

私は人骨があった洞窟の森の入り口に自転車を止め、森をしばらく眺めた。私の体の奥底に潜む得体の知れない何かが、鋭く疼くように反応した。私は何かしら怖けるものを感じ、やはり洞窟には近づかない方が良さそうだと思い直し、引き返すことにした。

宮古島から家に帰り着くころには辺りが暗く陰り、玄関戸を開けると、室内はひんやりと重い暗闇に沈んでいた。眼にはさやかに見えないが、闇の中で息を潜める生き物たちの呼吸が聞こえてきそうな静謐さだった。

その夜は早めに寢床に入ったが、体の中で何かが蠢くような感覚に襲われ、私は寝るのを諦めて庭の端に椅子を持ち出し、漁港越しに暗い海を眺めた。遠く潮騒が物憂げにリズムを繰り返し刻み、漁港の街灯に照らされた漁船があたかも寢息を立てるように静かに揺れて、暗い海の奥には宮古島の街の灯が疎らに灯っていた。

時折、生暖かい海風が肌を舐めた。目を閉じると、体の実体が消滅し、意識がふわりと空中に浮遊して漆黒の闇をさまよった。不意に、私の肩に誰かの手が触れた。恐る恐る目を開けて振り向くと、カーキ色の軍服に鉄帽を被り、歩兵銃を持ち、背囊を背負った若い日本兵が立っていた。

雲に隠れていた月が顔をのぞかせ、淡い光が兵士の顔を仄かに浮かび上がらせた。兵士がじっと直視している海面には、満月を過ぎて少し欠けた月が沖から陸地に向かって光柱の帯をつくり、神秘的な光景が出現してい

た。兵士がおもむろに私の方に顔を向けた。その顔は、いつも遺影で見っていた若い頃の祖父にそっくりだった。しかし、すぐに何か違うと直感した。その人には、左の目尻に黒子があった。大伯父の高雄だった。

「オカエリナサイ」

私は思わずそうつぶやいた。

大伯父は微かに微笑んだように思えた。

その顔は血と汗と泥で汚れ、胸の辺りには大量の血が滲んでいた。服も背囊もぼろぼろに裂け、腰ベルトの弾薬盒はよじれて切れかかっていた。

「イタクハ ナイデスカ？」

大伯父は小さく首を振り、私を悲しそうにじっと見た。その切ない眼差しに見覚えがあった。私はやっと気づいた。大伯父はときにヘビに化身し、家蜘蛛となり、ヤモリとなつて、あるときは鳥に身をやつし、ずっとこの家に一緒にいたのだということ。

大伯父はその視線を遠く海の彼方に移し、

じつと一点を凝視した。何かを恐れるように緊張し、顔を強張らせた。私もその視線をなぞり、月光に照らされて煌めく海を見た。突如として水平線に横一線に黒雲が現れたかと思う間に、海の底から湧き上がるような轟音が響いてきて、やがてその黒い塊が無数の爆撃機と夥しい数の艦船の群れであることがわかった。ガタガタと地面を震わすほどの凄まじい爆音に、私は大伯父に縋り付いた。

途端に眼前の情景が真昼の海辺に変わった。時間と空間の歪みに呑み込まれたように、大伯父の記憶の泉に迷い込み、私の視界はいつの間にか大伯父の見ている情景に同一化していた。

上空を見上げると、大編隊の爆撃機がヒューヒューと不気味な音を立てて無数の爆弾を投下し、辺り一面が凄まじい爆音と爆風に覆いつくされ、人間が次々に藁人形のように無残に舞い上がり、ばらばらの肉片が飛び散

った。

爆撃の間隙をぬって、今度は無数のグラマン戦闘機が燕のように鋭く地上に飛来し、容赦なく機銃掃射の雨を降らせた。執拗に繰り返される銃撃によって、逃げ惑う女たちや子どもたちがドミノ板のように重なって倒れた。海を埋め尽くした戦艦は、間断なく艦砲射撃を繰り返して白煙にかすみ、海岸線一帯は地形が変わるほどに鉄の爆風が荒れ狂い、白い航跡を引いた無数の上陸艦艇が海岸を目指して押し寄せてきた。

日本軍の戦闘機が入り乱れて空中戦が始まり、零戦が次々と海上の敵艦艇めがけて急降下した。艦艇は空に向けて狂ったように機関砲を連射し続け、急降下した多くの零戦が火を吹き錐揉みしながら墜落したが、弾幕の間隙を突いた数機が艦艇に特攻大破し、複数の戦艦から黒煙が立ち昇った。

海上で繰り広げられる烈しい戦闘を遮るように、突如として眼前には無数の敵戦車が

黄色い火炎放射を吐きながら次々に出現した。草地も木々も、隠れる場所を悉く焼き払い、至る所で日本兵が炎に包まれて踊り狂うように倒れていった。しかし爆弾を携えた日本兵は地から蟻のように湧き出し、戦車めがけて肉弾突撃を敢行して敵戦車の何台かを擱座させたが、背後の戦車から一斉掃射を受け、日本兵は悉く倒されていく。彼の潜んでいる塹壕にも戦車が刻々と迫り、爆弾を抱えた腕に汗が滲んだが、すんでのところでは退却の号令がかかり、視界は一転して夜の森の谷間となった。藪の中を喘ぎながら独り進み、やがて小さな泉に辿り着いた。浮いている死体をどかして、ためらうことなく水筒に水を汲み、乾いた喉を潤した。

昼間は石垣や灌木にかくれて砲弾を避け、夜陰に紛れて摩文仁の司令部を目指した。まだ煙が立ち昇る戦闘跡の集落にある大きな家に紛れ込んだが、中では布団をかぶったまま自動小銃で撃ち抜かれ、大勢の子どもや年

寄や女たちが死んでいた。赤子の泣き声に崩れかかった家を覗くと、幼子が瀕死の母親の乳房にしがみついて泣いていた。下半身を柱に潰された母親は苦痛の顔を向け、殺してと僅かに唇を動かし、幼児を差し出すような仕草をした。彼は青酸カリを母親の手にそっと握らせ、幼児を抱き上げた。母親は最後に微笑みに微笑むと、毒を煽って事切れた。

彼は着物で幼児を包んで負ぶり、死んだ母親に敬礼をして家を飛び出した。暗闇をさまよい歩き、やがて山間の壕に辿り着いた。中をうかがうと、体を寄せ合った五人の少女たちが手榴弾のピンに指をかけて怯えた顔をこちらに向けていた。摩文仁の司令部では司令官はじめ全員自決し、沖縄の日本軍は壊滅したことを知らされ、呆然とした。少女たちは師範学校と第一高等女学校の学徒隊だった。なぜかそのうちの一人に見覚えがあるように思えたが、うまく記憶の糸は結ばなかった。彼は少女たちに赤子とともに投降するよ

うに諭したが、自分たちだけでは恐ろしくで
きない、一緒に投降してくれるならと言われ、
彼はついに投降することを決意した。

翌早朝、幼児を抱いた少女たちと壕を出よ
うとした途端、不意にアメリカ兵に遭遇し、
咄嗟に自動小銃を向けられた。その瞬間、彼
は幼児を抱いた少女の前に立ち塞がった。乾
いた銃撃音とともに胸に激痛が走った。不意
に視界が真っ赤に染まり、赤子の烈しい泣き
声を聞きながら、意識がぷつぷつりと途切れた。

私はゆつくりと瞼を開けた。眼前には穏や
かな潮騒をたてる海が広がっていた。月はす
でに冷ややかに西空に傾き、東の空には朝の
仄かな明かりが水平線に薄く広がって、漁港
から次々と船が出漁して行った。

私は相変わらず椅子に腰かけたままだっ
た。私は、あの山間の豪で出会った少女の一
人が女学生時代の祖母だったことにやっと
思い至った。そして、大伯父が遠くに行って

しまったことを悟った。

すべてを破壊し尽くすように凄まじい暴風雨が三日間吹き荒れた後、翌日の朝にはあっけなく晴れ上がり、海と空が青色に溶け、焼けるような陽ざしと、けたたましい蝉の鳴き声が辺りを支配した。

私は眼前に広がる朝の海の情景に心奪われ、庭に立ち尽くしていた。

ふと右手で、背中の真ん中辺りをまさぐった。左の肩甲骨の下辺りに、ズーンとする鈍い微かな痛みを感じた。昨夜お風呂に入っているときも感じたが、直ぐ消えたので気に留めなかった。どこかに打ちつけたか、或いは筋を痛めたかと思ったが、それにしても静かすぎる痛みだった。私の体の中で、まるで別の生命体が生れ、小さく胎動を始めたような気がした。

胃の後ろ、背中側には二十センチメートルほどの膵臓が左右に細長く横たわっている。

胃の下部の十二指腸の中にその頭部を突っ込み、体部は胃の後ろを通り、左肩甲骨の下にある脾臓まで細く尾を伸ばし、その表面はごつごつと瘤に覆われて、グロテスクな芋虫を思わせる。私の膵臓は、手術によってその頭部が切除されているはずだから、さらに不格好で情けない姿をしているはずだ。

先月の定期健診では異常はなかったが、明日は念のため病院に行かなければならないだろうと思った。仮にがんが再発しているとしたら、覚悟を決めなければならぬ。

玄関の方で自動車のエンジン音がして、庭から家に戻った。玄関横に駐車したトラックから、あの男が降りて来た。

「やるのは、庭の木でいいのか？」

「ええ、よろしく願いします」

男はうなずくと、頭にタオルを巻き、作業用メガネを掛け、チェーソーを肩に庭に入っていた。

チェーソーはけたたましいエンジン音と、

オイルの臭いのする煙を吐き、繁茂した庭木の枝を易々と次々に伐り落としていく。縁側から東の海に抜ける一面の庭木は、ことごとく根元から伐り倒され、圧倒的な機械の力に木々がねじ伏せられていく、そんな光景だった。剪定が終わった後の庭木は、聞かん坊が叱られて行儀良く整列させられたように緊張して佇んでいる。自然に対する人間の勝利を宣言しているように見えた。庭木を伐採した海に面した一面からは、遠く海が見晴らせた。午前中で伐採は終わり、午後からは伐つた枝葉をトラックで搬出をしてくれるという。

剪定された庭の木陰に莫塵を敷き、冷えた飲み物と昼食を準備して、私は男が来るのを待った。男は汗を吸ったシャツを脱ぐと木の枝に掛け、裸のまま莫塵に胡坐をかいた。私は濡れたタオルとバスタオルを渡した。「ありがとうございます、助かりました。独りではとても無理だったわ」

男は無表情に濡れたタオルで顔をぬぐい、体の汗をバスタオルで拭くと、無言で返した。私は冷えた緑茶のグラスを渡し、受け取ったタオルをゆつくりと丁寧に畳んだ。

「ナオミさんたちが居なくなつたこと、知っているか？」

「えっ、じゃあ、アユム君も？」

「ああ、昨日の夜に慌ただしく出て行つた」
早く会いに行くべきだったと後悔したが、それより何よりあの親子が負っている理不尽な運命に憤つた。

「私、いつかの夜、あの子に半分は嘘を言つたの」

男は私を見たが、何も言わなかつた。

「人の性格は、後天的な環境の影響が大きいのも事実だから、あの子と父親が別の性格なのは間違いないと思う。でも、子どもの性格の半分は、親からの遺伝の発現による影響があると言われているの。だから、父親から受け継ぐものが何も無いなんて嘘だった。あの

親子の将来に、何かとんでもない禍が振り掛からなければいいけど」

男は緑茶を一気に飲み干すと、掌のグラスに視線を落とした。

「将来のことは誰にも分からない。少なくとも今は、あの二人は一緒にいた方がいい。オレはそう思う」

そう言うと男は、視線を開けた海に投げた。

「店をやらないかと言われていたんだろ？」

男の突然の問い掛けに、私は狼狽した。

「ええ、そうなの。迷っていたら、返事が間に合わなくなっちゃってしまっただけ」

「ナオミさんから伝言を頼まれた。店にある物は何でも使っていていいそうだ。家主にも話を通してあると言っていた」

「そう……。じゃあ、やってみるかな、お店」

男はじつと私の顔を凝視した。私はその刺すような視線に耐えかねて、目を伏せた。

男は昼食を済ませると、一時間経ったら起こしてくれと言って、莫塵に横になった。

風は止み、じりじりと全てを焼き尽くすような南国の強い陽ざしが地面を照りつけ、木の陰の温度を上げた。男の首筋から胸にかけて、焼けた肌に汗が沁み出した。私は家から団扇を持ち出すと、男の傍らに座り、ゆつくりと煽いだ。

私は海を見ていた。海面が陽ざしを乱反射して煌めいていた。その幻想的な光の中を、異界に迷い込んでいくように漁船が一艘、航跡を長く曳きながらゆっくり横切っていく。私はお腹に薄く残る手術の痕に、そっと手を触れてみた。その傷痕は生きているかのようになんかに盛り上り、百足のごとく身をくねらせている。

福岡に戻るべきかと思案を巡らせたとき、私はなぜこの土地にこだわり、この家で暮らしたいとあれほど思ったのか、やっと腑に落ちた。私は生きる場所を求めてこの土地にやってきました。しかしそれは同時に、死ぬ場所をも求めていたのかも知れない。

私に繋がる命の糸は、この土地で営々と紡がれ、この灼熱の土地の光の中に、そよぐ風の中に、寄せては引く波の中に受け継がれてきた。

死ぬのなら、祖母たちが暮らした海が見えるこの家で、海風に吹かれながら藻屑となつて朽ち果て、最後は眩しく輝くコバルトブルーの海を臨むこの土地の土に還りたかった。

私は静かに寝息を立てる男を見た。この男が海の彼方まで私を連れて行ってくれないだろうか、ふと思った。見渡す限り水平線の海原を漂いながら、死者の魂が帰るといふニライカナイの神々の国に流れ着けたらどんなにすてきだろうかと思った。

宮古島の海が私を呼んでいた。

顔にかすかに風を感じた。

私は、海風が再び吹き始めたことを知った。

(了)